池田理恵

Ikeda Rie

いけだりえ。長崎出身。長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻助教。2001年長崎大学薬学部卒業。同大学院薬学研究科博士前期課程修了。調剤薬局勤務を経て、2008年同大学院医歯薬学総合研究科博士後期課程修了。同年より現職。

男女に関係なく結果を出すことで認めてもらえる

薬学部では貴重な女性教員

長大の薬学部。ここでは、女子学生の割合は約五割とけっこう高いのですが、女性の助教はごくわずか。良くも悪くも目立ちます。

「うーん。そうですか？　私はもともと女性っぽいキャラクターじゃないから、たぶんたいして意識されていないでしょう（笑）。逆に女性であることで差別されたという覚えもないし。ラッキーなことに、ボスに恵まれました」。

化粧っ気はほとんどナシ。小柄であどけない顔立ちなので、学生に間違われてしまうこともしばしば。そんな池田先生の専門は臨床分析化学です。

「物の量を量る分析化学の手法を使って、臨床に役立つ情報を提供したいと考えています。特に、脳の中でどのような影響を及ぼしているかに大変興味があります。薬を飲んだ後に体内で起こる物質の量の変化を指標として調べています。複数の薬の飲みあわせの問題もありますね。それらを研究して、新しい事実が発見されれば学会や専門誌で発表となります。ハードですが、男女に関係なく、とにかく結果を出しさえすれば認めてもらえるのがいいところです」。

厳しい。でもわかりやすいですね。

「はい。ひとつのチームでお互いチェックし合うのですが、学生を育てていくのも同じチームプレイですね」。

患者さんのそばにいる新しい薬剤師

長大薬学部を卒業後、大学院を経て、一度は薬剤師の現場に出たものの、その後、再び医歯薬学総合研究科へ。二〇〇八年から長崎大学に勤務している池田先生。調剤薬局と大学という二つの現場を経験しました。

「大学とはまったく違い、薬剤師の仕事は一日中立ちっぱなしで、二十四時間いつ電話がかかってくるかわからない。責任の質も違っていて、間違った調剤をしてしまえば、最悪、患者さんが亡くなることもあります。逆に大学は、毎年入ってくる学生さんを、プロ意識をちゃんと持った薬剤師に育てるという責任があります。近年は、薬剤師の世界も、薬局の窓口にとどまらず、ベッドサイドへ行くという展開になってきました」。

連日、かなり遅くまでがんばるけれど、お休みが取れると趣味のカメラに邁進します。「県外のワークショップにも行きますし、この前は秋田の角館まで一人で足を延ばしてきました。黒塀に桜が映えて素晴らしかったですよ～」。ときには、薬学部に隣接した薬草園でファインダーをのぞくこともあるそうです。

ベッドサイド、ですか？

「はい。昔のように調剤薬局の小さな窓から薬を手渡すだけでなく、例えば病院ならば、入院している患者さんの枕元まで出向きますし、患者さんの自宅を訪ねて、薬の飲み方、効果や日常生活での注意点などを説明することもあります。言ってみれば、薬を渡すだけでなく、患者さんの生活をフォローしていく。当然、医療関係の他のプロの方々とも接していくコミュニケーション能力も求められます」。

なるほど、それが今の時代の薬剤師なんですね。

自分が学生の頃と比べて女子学生は現実的

「現在、長崎大学の薬学部は、主に研究者を目指す四年制と、薬剤師を目指す六年制に分かれています。つまり、受験前に将来を具体的にイメージしないといけない。自分が学生のころなんて、視野も狭かったし、もったいない時間の使い方だったような気がするんですが、今の学生さんたちはよく考えていると思いますよ。特に女子学生は現実的です。大学に残るよりも、企業で研究したいという志を持つ人が多いんでしょうか。学会では企業で活躍する女性の研究者によく出会います。でも、大学でしかできない面白さも是非知って欲しいですね」。

学生一人ひとりの性格に応じて接し方を変えながら、最終的に学生の自主性を引き出し導いていく――昨年度までのチームの"ボス"であり、師事していた中島憲一郎名誉教授の姿を例に挙げ、早くそのくらい頼りがいのある存在になりたい、とも。

けっして派手な存在ではないけれど、地に足の着いた「お姉さん」として、迷える学生のよき相談相手となっているようです。

働くウーマン奮戦記

大学はわたしの仕事場 ③

長崎大学で働く女性教職員の活躍ぶりを毎回お一人ずつ紹介します。ステキな先輩たちの後ろ姿を見て女子学生も何かを感じて欲しい。そんな願いをこめたコーナーです！